

「新・方法」講義立会記

たか（あるくタイプのひきこもり） @10aka_

かつての「方法」の活動を知っており、これからその後続（のように思える）「新・方法」の活動にも足を踏み入れようとする者は、誰しも一抹の身震いを禁じ得ないことだろう。所与の論理の反復に愚直なまでに死力を尽し、他の追従の可能性を論理的に排除するようなあの「方法」の活動、その名を豪気にも自らの活動名へと引用してみせる彼らは一体何を為さんとしているのか、と。そしていざ蓋を開けて襲ってくるのは言い様のない戸惑いである。彼らの活動報告に並ぶ写真は宝くじに海水浴他、「方法」では極力排されていた現実の躍動感が薫る、少しばかり自意識過剰な日常の数々、それ以上でも以下でもない。これは一体何の謂いか。

実は問題の「新・方法」の活動には、先に挙げた現実を舞台にする一群の事例の他に、また一味異なる傾向を見せる作品群がある。毎月4日に配信されるEメール機関紙『新・方法』に付される形で発表されるウェブ作品である。こちらを見ると、まずそのEメールという配信手段からして「方法」のそれと似通っており、また作品自体その一見奇怪な形式につけても、かつての「方法」の歴史を知る私達にとってはもはやある種の安心感さえ覚えるものである（慣れとはかくも恐ろしい）。両作品群間のこのような印象の違いは、「新・方法」が抱える作風の不安定と未成熟の表れとして捉えるべきなのだろうか。もちろん、そのように考える向きもあることであろう。そして主義の徹底のためには焦点を一つに絞るべきだとの立場から彼らへの批判もありえるかもしれない。だがしかし、私はむしろこの分裂にこそ、「新・方法」という活動を理解するためのヒントを求められるのではないかと考える。以下にその所以を述べてみよう。

まず、ウェブ作品であるが、これらが一貫して扱うものは、唯一にして完全なるアイデアとそれに対応する現象との関係であり、かつての「方法」（とりわけ中ザワ氏による一連の作品）の立場を正當に継承しているといえよう。

対して現実界での作品であるが、これは「方法」におけるパフォーマンスとの対比の上で分析するとその特徴がよく分かる。「方法」のパフォーマンスを思い返してみると、彼らの主義並びにウェブ上の作品との関係性という点において、それらは一言で、分かりやすかった。それらはまさしく論理に基づく演算を、現実の上に忠実に「擬（なぞら）える」ことを目指していた。しかし裏を返せばこのパフォーマンスは、元来計算機上の論理界で実行していれば事足りた、いや寧ろそちらの方がその主義の純潔を保持できたはずの演算をわざわざ現実界に引き摺り込むような、ある意味多分にロマン主義的な姿勢と言える。

論理界とは入力項が同時に——「瞬時」という表現さえまだるっこい、まさに「同時」に——処理され、出力として吐き出される世界である。その一方で現実界はその扱いに際して論理界とは幾分異なった対応を要求する。もちろん現実界とて先の論理界の原理に依

拠する形で成立していることは疑う余地のない事実ではある。しかしながらその構成要素・要因の乱立とそれらの間に錯綜する論理束の複雑さ故に、この現実を論理の集合として理解しようという試みはもはやあまり意味を成さない。

「方法」のパフォーマンスは、ある作品中でその支配者として王座に上げた一筋の論理への忠誠を守るべく、現実界で入り乱れているはずの他の一切の論理を切り捨て不問のものとする形をとる。彼らにとっての現実とは、論理界における演算の挙動を、現実界の事物（それは例えば音であり、鉄道であり、カクテルであった）を画材に拡大描画するディスプレイとしての存在に留まるものであった。言ってしまうえば「方法」が次第に内部に矛盾を抱え込み、最終的にその終焉を迎えたのも、このパフォーマンスという行為自体に埋め込まれた空虚さ故のものではなかったか。

対して、「新・方法」が選択した現実へのアプローチは、それとは全く違ったものである。すなわち、現実界において純然たる論理に貞潔たるをひとまず諦め、その演算の舞台と演者とをまるごと現実界へと移し替えて見せたのだ。論理界の支配原理としての論理に相当するものは、現実界においては常識や慣習である。前者が数学的に普遍であるが故に正統性を保証されるのに対して、後者は社会的・統計学的に「普通」であるが故に正統性を仮称されるものであり、即ちこれを倫理と言い換えてもよい。彼らは、自身を取り巻く状況・環境を舞台に、入力された問——それは棚への展示の依頼であり、新たな年の訪れであり、アノニマスの暗躍であり——を受けて、それに応じた社会的に最も常識的と判断されている所の行動、即ち倫理的な行動——それは棚に本を戻すことであり、初詣であり、清掃活動への便乗であり——を解として出力する。

「方法」は「倫理としての論理」を、即ち微視的なものとしてのみ観測されうる個別の論理を、当然遵守されるべき倫理として現実界に持ち込み、己に課す。「新・方法」は「倫理としての倫理」を、即ち巨視的な視点から押し付けられた行動を、愚直なまでにそのまま受け入れ、遂行する。その過程では、快樂を必然のものとする状況下における快樂は、禁止にも奨励にも無関心に、ただ生起するものとして生起することが看過される。

なおここに付言するならば、「新・方法」の活動は、その性質上必然的にその状況下において極めて凡庸、ステレオタイプカルな姿をとることとなり、それ故彼らの活動はかつての「方法」の歴史を保持する私たちの記憶の中で初めて芸術活動たりうる。その意味で、新・方法主義者としての彼らは、まさしく私たちの記憶の中のみ存在している。

最後に「新・方法」の比較・批評に関して述べるならば、その鑑賞者が何をして「方法的たるもの」としての価値の源とせしめるかによって意見が二分されることは明らかであろう。彼らを目前に誰もが頭を捻り、首を傾げる。「新・方法」は個別の論理への不貞という墮落なのか、はたまた必然への服従の徹底という進化なのか？しかしそのような言葉の応酬は彼らの活動の前ではひどく空しく響く。そうして私達が現実界に垂れ流すそのような煩悶の行き着く先、「新・方法」の三人はと言えば、それには悉皆無関心に、しかし同時に皆是服従して、日夜「新・方法」たるを実践しているのである。